山形保険医新聞

Yamagata medical practitioners newspaper

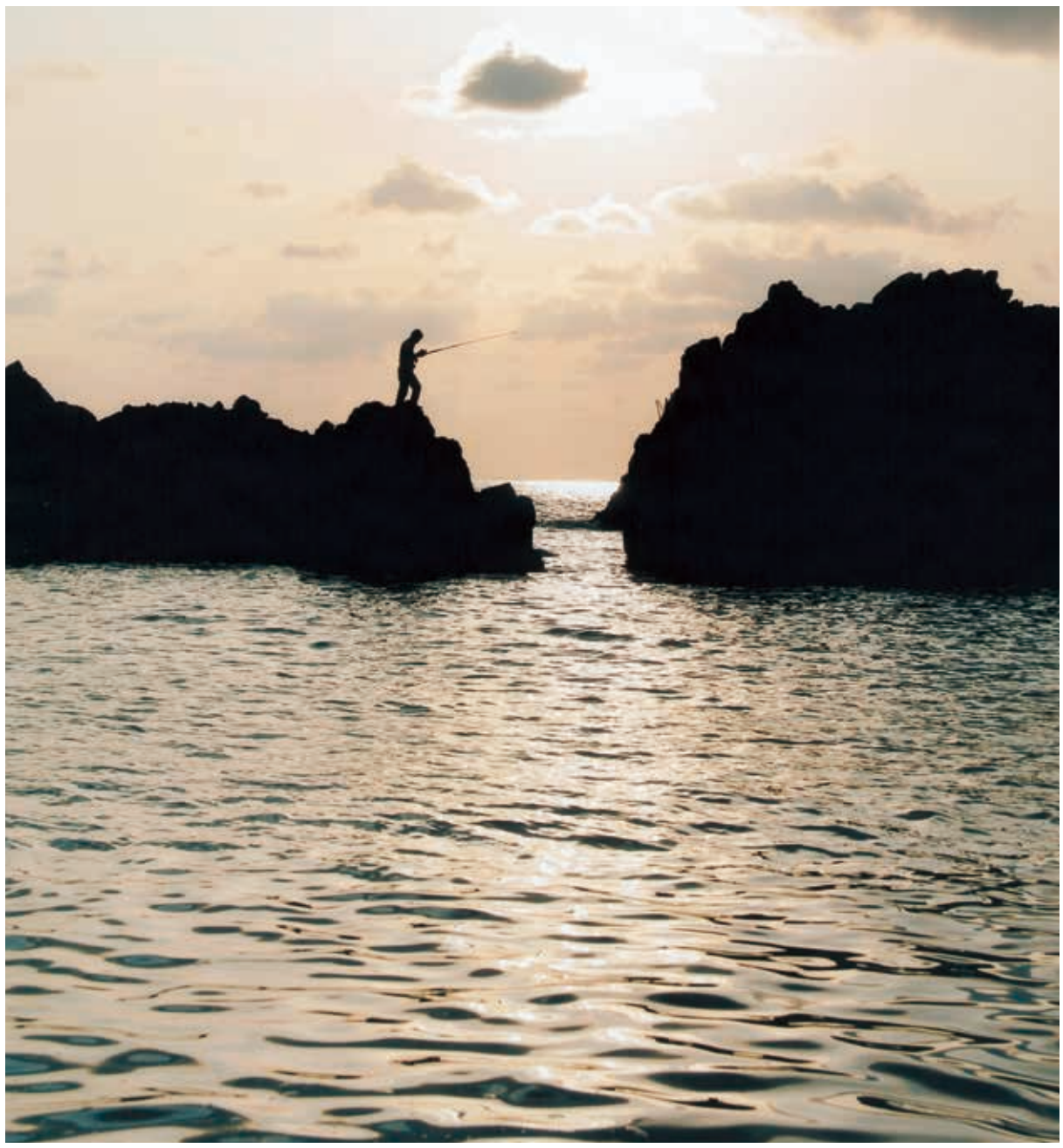
発行
山形県保険医協会
〒990-0043 山形市本町二丁目1の2フコク生命ビル
電話 023(642)2838
FAX 023(642)2839
購読料 〒共1ヵ月 500円
印刷 コロニー印刷
第501号

8月夏季特別号 TOPICS

2面…厚生局指導情報開示
3面…次期診療報酬改定本格議論
4面…歯科医院経営コロナ影響調査
5面…日本の城郭
6面…気になるワインの話

残暑お見舞い申し上げます

役職員一同



「至福の時 令和2年夏、夕方、由良」 撮影 山形市 小屋歯科医院 小屋一成先生

理事長あいさつ

中島 幸裕

最近は地球温暖化の影響のためか、夏の暑さも尋常ではなく、集中豪雨の被害も年々ひどく感じる今日この頃です。

さらに、昨年からの新型コロナ感染症拡大により、受診抑制が一気に進み、医療機関の経営は存続の危機に陥りました。そして、第4波が収まりつつあったのもつかの間、オリンピック・パラリンピックの開催で、第5波となっています。

日常診療の中では、発熱患者の動線分離、感染対策に加え、複雑なワクチン接種関連業務が重なり、医療従事者の負担は大変な状況となっています。

そんな中、政府は緊急事態宣言下においても、「すべての医療関係者に事業の継続を要請」しています。しかし、医療機関の経営悪化については、減収補填を行っていません。コロナ感染症拡大による経営悪化の責任を医療機関に押し付け、国民皆保険制度における国の責任を放棄していると言わざるを得ません。高い公共性と非営利性を有する医療において、事業継続の要請と減収補填はセットでなされるべきと考えます。

これらの問題の背景には、政府の新自由主義政策があり、自己責任を基本に小さな政府を推進する新自由主義は、結果的に格差と貧困を拡大させていったと考えます。7月に開催された全国保険医団体連合会の夏季セミナーで講演したジャーナリストの青木理氏は、「感染症こそ一番に想定するべき安全保障。政府は『国民の命と安全を守る』と繰り返してきたが、どう守ってきたというのか」と手厳しく批判しました。今回のコロナ禍で、日本の医療制度の脆弱性が露わになったとも言われています。今後の日本の社会保障のあり方を考えるきっかけにしなければならないと思います。

待合室キャンペーンはじまります！

クイズで考える私たちの医療

クイズチラシの見本は8月下旬に送付予定

つばさ

お盆の月に恐縮ですが、最近「寿命」というものを考えます。鶴は千年、亀は万年と長寿は古来めでたいことでした。最近の長寿者は診察のたびに「まだ生きてた」「いつまで生きてんだろうね」「なかなか迎えが来ない」などの話になります。つい佐藤愛子さんの著書「九十歳。何がめでたい」を思い出します。

日本人の寿命は江戸から明治頃で40才台、昭和20年代で50才台、昭和50年ごろで70才台、平成に入り80才台で、現在は90才から100才も珍しくありません。「サザエさん」の波平さんは53才でまもなく定年を迎える設定ですが風貌からは現在なら70才ぐらいに見えますね。

現代は「長寿必ずしもめでたからず」。成長した子供は家を出て結婚し、親とは同居せず、長い老後を夫婦2人で過ごし、どちらかが病で倒れて介護生活へ。ヘルパーや訪問看護の助けを受け、最後は施設入所となり人生の最終ステージへ。ここでもコロナ禍で外出もままならぬ不自由な生活を強いられます。定年や仕事を終えた後の人生が灰色に見えてしまいます。

江戸時代の長屋の御隠居のようなのんびり、それでいて「年寄」が、ある程度威張っていられる昔をうらやましく思ってしまいます。老後資金に縛られる現代が果たして幸せなんだろうか？何かが違う気がするこの頃です。（K）